

「自然・人・福祉との関わりから児童生徒を支える居場所づくり
～「麦の穂プロジェクト」から「ひまわりプロジェクト」へ～」

[事業責任者]

[自治体側]

那珂市教育委員会

教育長 大縄 久雄

[茨城大学]

教育学部学校心理学研究室 准教授 丸山 広人

1 連携先

- ・那珂市教育委員会
- ・那珂市教育支援センター

- ・高畑恵美子（那珂市教育支援センター，
相談員：研究員）
- ・勝山 洋光（那珂市教育支援センター，
就学担当相談員：研究員）

2 プロジェクト参加者

- ・丸山 広人（茨城大学教育学部，准教授：
企画立案，指導助言，総括）
- ・沼田 義博（那珂市教育委員会指導室長：
企画，運営，全体総括）
- ・野村 仁（那珂市教育委員会指導主事：
企画補助，渉外担当）
- ・久保田善徳（那珂市教育委員会指導主事：
企画補助，渉外担当）
- ・中庭 一俊（那珂市教育委員会指導主事：
企画補助，渉外担当）
- ・小宮 隆春（那珂市教育支援センター，
センター長：企画，運営，全
体総括）
- ・綱川 弘樹（那珂市教育支援センター，
カウンセラー：会計，庶務，
研究員）
- ・戸倉 花子（那珂市教育支援センター，
カウンセラー：研究員）
- ・大久保れい子（那珂市教育支援センター，
相談員：研究員）
- ・湯澤 智子（那珂市教育支援センター，
相談員：研究員）

- ・加倉井 正（那珂市教育支援センター，
相談員指導員：研究員）

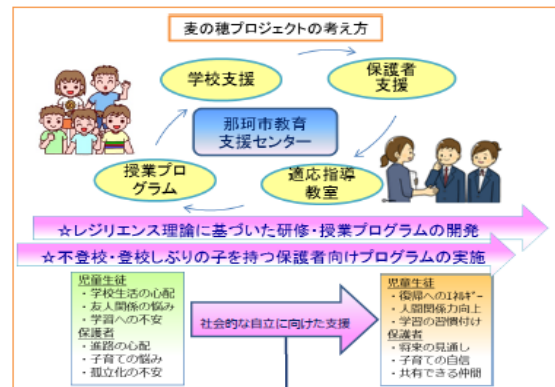
3 プロジェクトの実施概要

① プロジェクトの目的

本市では平成 28 年度より茨城大学戦略的地域連携プロジェクトとして「麦の穂プロジェクト」を立ち上げ、「しなやかで折れない心を育てる(レジリエンス)」プログラムの開発を進めてきた。平成 28 年度には，プロジェクトの全体像立案と実践的な支援プログラムの作成を行った。児童生徒が学校生活上の諸問題に直面したとき，前向きな気持ちをもって立ち向かい，しなやかに受け流す「強い心」や「折れない心」の育成を目指し，レジリエンストレーニングプログラムの開発を行った。平成 29 年度には，それらの支援プログラムを各小中学校で実践し，児童生徒の自己肯定感を高められるプログラムになるよう改良を加えてきた。平成 30 年度には，出前授業を通して支援プログラムを各学校に紹介し，先生方にレジ

リエンストレーニングの意義や方法を広めることを目的として実践してきた。

これらの茨城大学戦略的地域連携プロジェクトの助力のおかげで、本市教育支援センターの成果が認められ、教育支援センターの移転に伴い施設や人員の拡充が行われることとなった。県内屈指の広さを誇る大型の教育支援センターへと変わることで、活動プログラムが多様化するとともに、地域や家庭と連携しやすいセンター機能も有することができるのではと考えている。また、人員の拡充により、教育支援センターへスクールソーシャルワーカー（以下、SSW）を配置することを目指した。これにより、教育支援センターから福祉部門へのアプローチが可能となり、教育部門・心理部門・福祉部門の連携の強化が期待できる。



【資料1 麦の穂プロジェクトの考え方】

今までの「麦の穂プロジェクト」では、学校やセンター内での授業で実践できる活動プログラムが中心であった。そこで、本事業は、センター移転に合わせて不登校や登校しぶりの児童生徒だけでなく、現代的な諸課題を抱えている児童生徒が、しなやかに受け流し「折れない心」を育成するために、「自然との関わり」「人との関わり」「福祉からのアプローチ」の3つの側面を加えた「ひまわりプロジェクト」としてレジリエンス理論を補完・拡充し、より有効な活動・連携を見いだすことを目指す事業とした。

ひまわりプロジェクト



【資料2 麦の穂プロジェクトを補完・拡充した「ひまわりプロジェクト」イメージ】

② 連携の方法及び具体的な活動計画

ア 連携の方法

本事業にあたっては、那珂市教育支援センターのスーパーバイザーである丸山准教授が、事業全体の構想から各活動の企画・運営全般について随時指導助言を行った。また、年間5回、那珂市教育支援センター研修会において、職員の資質向上とともに、心理部門、福祉部門、教育部門の連携や有効な体制づくりについて指導助言を行った。

イ 具体的な活動内容

i 自然との関わり

自然豊かな環境の中で自然体験活動を行うことにより、レジリエンスや自己有用感を高めさせ、不安や悩みに立ち向かえる心の強さを育成する。また、その有効性について実証研究を行う。

ii 人との関わり

地域の人々や保護者との関わりを体験活動プログラムとして実施し、同じ悩みをもつ保護者をつなぐネットワークをつくることで、児童生徒を支える連携体制をつくる。

iii 福祉からのアプローチ

市こども課との連携を強化するとともに、教育支援センターへSSWを配置することで、児童生徒の環境改善を図りレジリエンスの育成を行いたい。

③ 期待される成果

ア 大学がもつ専門的見地からの支援

「強くしなやかで、折れない心」を育成するにあたり、友だち関係で不安を抱えたり不登校で悩んだりしている児童生徒の心性をよく理解し、配慮することが重要である。そのため、大学がもつ専門的見地を生かしたプログラム開発や3つのアプローチの有効性の検証を行うこと

で、目的達成に向けた効果が期待できる。

また、児童生徒の心理特性や過去の体験等に応じた具体的な助言・提案を行う上でも、茨城大学教育学部並びに教育学研究科の学生・院生等による人的支援は大いに有効である。

イ 行政機関からの支援

教育支援センターの移転により、児童生徒の活動だけでなく、研究・研修の場としての機能を有することができる。この環境を、大学を中心とする関係機関との連携体制の確立に活用し、その専門性を大いに発揮できるステージ並びに種々の教育理論を検証する実践の「場」として、大学の研究に役立てることを期待し、大学と自治体の地域連携モデルを提案した。

4 プロジェクトの実施成果

① 活動実績

ア 自然との関わり

i ベビーリーフを育てよう体験

: 5月21日

食について考えることは生きることを振り返ることでもある。食物を育てて、それを食べるという経験を通して、育てることを楽しんだり、食べることを実感したりしながら、食について考える機会とした。



【資料3 ベビーリーフ育成体験】

ii お弁当作りと地域散策体験

: 6月12日

自分で食事を用意することで食に対する意識を深めていく。また、屋外で様々な感覚を刺激することで、より「生」に対する意識を深めることにもつながる。自分で作ったお弁当を持参し、散策しながら食し、楽しみながら様々な感覚を刺激することで心理的な開放と安定を図る体験とした。



【資料4 弁当づくり体験】

iii ネイチャーゲーム体験

: 10月25日

五感による様々な自然体験を通して、自然や環境への理解を深めたり、美しさや面白さを発見し合ったりすることをねらいとした。雨天のため、残念ながら室内での実施となった。



【資料5 屋内でのネイチャーゲーム】

iv 座禅体験・リンゴ狩り体験

: 11月1日

集中力を高めることは不安の軽減にも役立つとされている。座禅は意識の集中と拡散の繰り返しであるが、それ自体にリラックス効果があると言われている。日本に伝わる文化としての座禅を学び、豊かに実ったリンゴ狩りを楽しみ自然に触れる体験とした。また、今回の行事には、保護者会から3名が参加した。



【資料6 リンゴ狩り体験】

イ 人との関わり

i 将来なりたい仕事を考える体験

: 7月12日

カードなどを使い、子どもたちが楽しめるような方法で自分自身の将来について考えることによって、今現在の過ごし方や近い将来について考えるきっかけとした。

参加者同士の交流が、もう少しあると良かったという反省点も見いだされた。



【資料7 ゲームを使ったキャリア指導】

ii 携帯電話の使い方を学ぶ体験

: 7月17日

SNS を始めとするインターネットの利用は生活を豊かにしてくれる一方で「影」の部分がある。利用にあたってのトラブルは絶えない現状を見据え、十分な管理と利用方法について理解を深める体験とした。

LINE でのやりとりの仕方を含め、今後も家庭との連携を強めるとともに、意図的・継続的な支援が必要であると感じた。



【資料8 情報モラル指導】

iii 高校見学会体験

: 8月22日

身近な進路選択を考える機会として、県立小瀬高等学校見学を行った。子どもたちからは、「高校見学は何度か行ったけど、校舎が広がった。高校の先生の説明が丁寧で分かりやすかった。」「これからどういう所に行けばよいか、多少は先を考えておいた方がいいかな。」という感想が寄せられた。今回の行事にも、保護者会から3名が参加した。保護者からは、「学校に行けなくて、ひまわり教室(適応指導教室)に来ているから進学が駄目なんだという劣等感をもって欲しくない。」というような切実な意見が出された。



【資料9 県立小瀬高校教頭先生から】



【資料10 小瀬高校校内見学の様子】

iv スラックライン体験

: 12月12日

体幹を鍛えたり、集中力を高めたりすることが期待でき、集中力を高めることは落ち込みを緩和すると言われている。また、身体感覚を研ぎ澄ますことで心身の安定が図れると考え、本体験を実施した。

今回の行事には、保護者会から3名が参加した。「良い気分転換になりました。身体を調える、いい機会になりました。」という感想が寄せられた。



【資料11 保護者と一緒に活動】

v 心と身体を整える「ヨガ」体験

: 1月22日

レジリエンスを鍛えるためには、深い呼吸をしながら身体に意識を集中するという作業が重要となる。今回も講師を招聘し昨年度に引き続き実施した。なお、1名の保護者が参加した。



【資料12 講師によるヨガの効果】



【資料13 ヨガの活動】

vi アフタヌーンティー体験

: 2月10日

味覚を始めとする感覚に集中することは不安な気持ちを軽減する効果があるとされている。また、イギリスの文化を学ぶことでより広い価値観に触れることにも繋がる。今回は、市教育委員会所属のALTの先生を講師としてお願いした。日常とは異なる文化にふれる貴重な体験にもなった。今回は、2名の保護者が参加した。



【資料14 ALTによる異文化体験】

vii 那珂思春期保護者会「たいよう」の活動

那珂市内で子育て等に悩む保護者に対して、那珂市教育支援センターと連携しながら、同じ視点を共有するとともに、保護者相互が互いに支え合う仕組みづくりが求められた。

これまでも、那珂市教育支援センター主催の事業(プログラム等)に保護者が参加し、一定の成果を収めてきた。さらに令和という新しい時代を迎えるとともに、茨城大学戦略的地域連携プロジェクトの支援を受け、那珂市内の思春期の子育てを行う保護者の相互サポートに関する活動及び啓発をいっそう図りたいと考えた。そこで、思春期にある子どもたちの支援に寄与することを目的として那珂思春期保護者会「たいよう」を設立するに至った。

組織化のため、不登校の子どもを抱える9名の保護者の賛同を得て、簡素な規約を作成するとともに、会長に保護者の代表を置いた。

主な取組について、以下に記す。なお、ひまわり教室(適応指導教室)の行事にも積極的に参加する姿が見られるようになった。

6月8日(土)、不登校を脱却した父親と発達に偏りのある子の母親から、子ど

もとの関わりや子育てに関する話題を提供してもらった。フリートーク形式で会を進め、保護者の目線に添った意見発表が参加者の共感を呼んだ。参加者は7名であった。

8月3日(土)、「家庭でのインターネット利用を考える」というテーマの下、子どものネット活用並びに情報モラルに係る研修を実施した。講師是那珂市教育支援センター所員が務めた。話を聞き、知識を得るだけでなく、具体的な対処策等を話し合ったり情報交換したりした。参加者は4名だった。

12月14日(土)、「子どもの不登校を経験した保護者の気持ち」をテーマにし保護者会を実施した。子育てに関する悩みやそれに伴う心境の変化等、保護者の方々から生の声を共有し合い、支え合いのネットワークのさらなる展開を目指した。参加者は10名であった。

1月11日(土)、2020年度に那珂市教育支援センターが現在の菅谷地区から戸多地区へ移転する。移転に関し、通常の業務が縮小されるとともに、保護者相互で今後の教育支援センターに期待する事などの意見交換を行った。参加者は8名であった。

なお、これまでの茨城大学戦略的地域連携プロジェクトの支援を受け、市教育委員会をはじめ市執行部も今後の教育支援センターの役割について大きく期待することとなり、多額の費用を投じて旧戸多小学校の校舎を改築し、新たな教育支援センターが設立された。

今後、3月28日(土)には、「不登校を経験した子どもの気持ち」というテーマを設定し、不登校を経験した子の声に耳を傾ける機会として保護者会を実施することとした。



【資料15 保護者会の様子】

ウ 福祉からのアプローチ

本教育支援センターのカウンセラーが不登校児童生徒の自宅に家庭訪問するなどし、保護者の心の安定や今後の方策等への支援を続けてきた。家の中が片付けられていない不衛生な家庭環境にあったり、保護者が働こうとせず所得が低い家庭、療育に不安を感じる家庭が見られたりする。本来、カウンセラーが外に出て、具体的に家庭を支援するものではなく、スクール・ソーシャルワーカーが支援にあたるものであり、スクール・ソーシャルワーカーの配置が以前から切望される現状である。

今年度は、これらの環境をつくるため、教育支援センターへのSSW配置を求め、その活用について研究を実施した。この研究成果をもとに、SSWを教育支援センターへ配置することの有用性を以下の通りまとめた。

i 不登校対応の最前線で支援ネットワークを「つなぐ」存在

高齢化社会が進む中で、若者の労働力が限られ、経済力や生産・購買力など日本の国力の衰えを止めることができなくなる。

那珂市でも教育支援センターへも足を運ぶことができず、家の中に引きこも

り状態で昼夜逆転の生活になってしまっている児童生徒もいる。

そこで、直接不登校児童生徒の家庭に入り込み、学校や教育行政と「つなぐ」存在が必要となる。

ii S S Wを支援センター配置にする有益性

- 機動力が上がり、継続性が担保できる。家庭訪問や会議を定期的実施でき、活動の継続性が保証されるメリットが大きい。要対協など要保護性の高い事案の場合には、数年継続して福祉と教育が連携することで、ケースワークの見通しが的確になると考えられる。
- カウンセラー等の心理職とS S Wの連携がスムーズに行える。同じ施設に常駐することで、時間をかけて協議することができ、心の安定と生活支援という両輪がうまくかみ合うことが期待できる。
- 市内の機関・学校を結ぶ線を強固なものにできる。学校で起きている事案を共有することで、事例案件の蓄積が容易になり、学校と関係機関とのつながりを強化することができると考えられる。

iii S S Wの動きをシミュレートした事例研究

市内の事例をもとに、S S W配置後の、具体的な動き方について事案検討を行った。各事案に対して、S S Wがやるべき動きを選別し、必要な関係機関との連携の仕方を検証した。特に、今年度の事例から5事例で効果ができることの確認ができた。

② 今後の計画と課題

ア 事業を実施しての課題

- ・大学との連携において、学生ボランティアの活用を、各種体験活動に十分に生かすことができなかった。
- ・プロジェクト全体の年間計画の作成で、教育支援センターと市教委が、年度当初に十分に大学教官と協議を行い指導助言をもとに企画立案を行う必要がある。年度途中で担当教官より指導・助言を受けながら修正することとなった。
- ・今までの茨城大学戦略的地域連携プロジェクトからの助力により、新支援センターの規模や人員を拡張することができた。特に、今後のプロジェクトにとってS S Wの活用は大変重要なものになるが、実際の運用は来年度以降となる。今後、福祉部門からアプローチを具現化し、児童生徒のレジリエンス育成につなげていきたい。

イ 今後の計画

- ・新支援センターは、茨城大学や研究室でも活用可能な施設であることから、臨床研究の場として、双方にメリットがある連携を深めていきたい。そのため、施設の開放、事案の共有、人材育成などについて進めていきたい。
- ・S S Wが支援センター配置である有益性を具現化し、福祉部門からの支援により、児童生徒のレジリエンス力が向上していくことを立証していきたい。特に、本年度、社会福祉協議会内に「ふくし相談センター」が設けられ、本市教育支援センターとの関わり方なども模索していきたい。
- ・「自然との関わり」「人との関わり」「福祉からのアプローチ」の3視点を加えた、レジリエンスを高めるプログラム開発を目指す。